

5 定期便搭乗者数の推移

昭和39年7月に東京便が就航、次いで、大阪(伊丹)便(昭和54年5月)・札幌便(昭和54年10月)が就航し、東京便の増便もあり、ピーク時の平成3年には約74万人の搭乗者数となった。

その後も名古屋便(平成4年4月)・大阪(関西)便(平成7年4月)・福岡便(平成8年6月)・函館便(平成10年6月：季節運航)の就航はあったものの、平成4年の山形新幹線開通の影響による東京便の減便や、福岡便の運休(平成10年4月)、大阪(関西)便(平成14年7月)の運休、名古屋便・大阪(伊丹)便・札幌便の使用機材の小型化、平成20年のリーマンショックの影響による大阪(伊丹)便の減便や札幌便・名古屋便の運休(平成22年10月)、東京便の使用機材の小型化などにより搭乗者数は減少傾向が続き、平成23～25年は11万人台となるなど低迷した。

その後、東京便の増便や名古屋便の運航再開(平成26年3月)により搭乗者数は増加に転じ、さらに、名古屋便の増便(平成28年3月)、札幌便の運航再開(平成29年3月)もあり増加傾向となり、平成30年に30万人台を回復し、令和元年は33万2千人となった。

令和2年以降、新型コロナウイルス感染症の感染拡大により航空需要が低迷し、令和2～3年の搭乗者数は12万人台まで落ち込んだが、令和4年後半頃から感染状況が徐々に落ち着きを見せ、旅行支援策等の効果もあり、令和4年は約26万人まで回復した。

